将来のために「知る」

岩手大学教育学部附属中学校
三年　佐藤　凜歩

「『持続可能性』とは、あるいは『持続可能な社会』とはなんでしょうか。」

総合的な学習の時間の中で講師の方からこのような問いがあった。最近よく耳にする「持続可能性」、「持続可能な社会」という言葉。「地球温暖化が防止される社会？」「貧困がなくなること？」頭の中でいくつかの言葉と共にハテナマークが浮かびあがってきた。問いに対して講師の方はこう答えてくださった。

「自分たちが将来にわたって継続していきたいことを考え、それを守り、作り出し、将来に繋げていくこと。それが持続可能性だと考えます。」

自分が予想していた答えとは全く違う答えが返ってきた。頭の中で想像していた地球温暖化や貧困などの言葉が出てこなかったことにまず驚いた。一番驚いたことは「作り出す」

という言葉がでてきたことだ。今まで、「持続可能な社会」の話の中では「作り出す」という言葉を聞いたことがなかった。講師の方のこの答えは今までの自分とは違った視点であり、得ることが多くあった。それと同時に講師の方に気付かされたことがあったように感じる。それは、自分は「持続可能性」や、「持続可能な社会」についてあまり知ったつもりになっていたということ。同じ視点で考えたとしても違う視点で考えたとしても知らないこ

とがたくさんあるということを。

その講演会の数日後に公民の授業があった。その授業では「持続可能性」について学んだ。「持続可能性とは、現在の世代の幸福と将来の世代の幸福とを両立させることを意味します」

教科書にはこう書いてあった。講演会の時とはまた違った「持続可能性」についての新たな視点を得た。それは「幸福」だ。私はその「幸福」の視点で「持続可能性」について考

えてみた。現在の世代の幸福とはなんだろうか。将来の世代が求めている幸福は現在の世代と同じものなのだろうか。それとも現在の世代とはまた違うことが幸福として求められてくるのだろうか。そのようなことを考えてみた。しかし、想像がつきにくく、将来の世代のことを考えるのは難しく感じた。ましてや、現在の世代の幸福について考えるのも少し難しいと感じた。それは一人ひとりの「幸福」の感じ方が違うと考えるからである。自

分自身が感じる「幸福」を将来の世代にも繋げていくこと。それが「持続可能性」への一つの手段であると考えた。このように公民の授業をきっかけとして「持続可能性」について深く考える出来事があった。

英語の授業の中でのSDGsについての討論、家庭科の教科書の目次を見ると全ての単元の最後には「持続可能な社会をつくる」という題。このように私たちの学校生活には、「持続可能な社会」という言葉があふれてい

る。世界全体として「持続可能性」について
の必要性が高まってきた。だからこそ、「持
続可能性」という言葉を日常であまり聞かな
かった小学生の時に比べて、最近ではその言
葉を授業で触れる機会が圧倒的に多くなった。
言い方を換えれば、必要になってきたからこ
そ、授業で取り扱うなど、将来の世代を担っ
ていく私たち中学生に知る機会を与えてくれ
ているのではないか。それに応えるように私
たち「持続可能な社会」について更に知る

ということ意志をもって授業に取り組んでいく
ことが大切だと思う。
「持続可能な社会」について知り、自分事
として捉える。そして自分に何ができるかを
考えて実行していく。それを一人ひとりが意
識して行動していくことで大きな力となり、
「持続可能な社会」に繋がっていくのではな
いかと考える。何も知らないままでは行動を
考えることも取り組むこともできない。アク
ションを起こすための前段階として「知る」

ということが大切だと考える。だから私は、「持続可能な社会」に向けての取り組みとして「持続可能な社会」について「知る」ことが一番大切だと思う。

今日も私は「持続可能な社会」について新たな情報を得る。人類が現在に至るまでに創りあげてきた「持続可能な社会」の中で、新たに生まれてきた課題や失われつつある部分を少しずつ修正したり、新しいことを作り出したりしながら、将来の世代の「持続可能な

社会」のために。それが中学生の私にできること。そして、使命。